

基地の島、で戦争を学ぶ

特集 夏期集中講座・ゼミ合宿

沖縄ジャーナリズム論

文学部人文・ジャーナリズム学科の学生が、「オキナワ」と向き合う夏期集中講座「沖縄ジャーナリズム論」(担当・山田健太教授)が今夏、沖縄タイムス社の協力講座として初めて行われた(9月5日〜9日、学生16人が参加)。

太平洋戦争で唯一地上戦が展開され、米普天間移設など米軍基地問題に揺れる沖縄。学生たちは、複雑な現代史を持つ沖縄の新聞社や戦争の爪痕を残す現地を訪ね、関係者にインタビュー。元沖縄県知事の大田昌秀氏、前宜野湾市長の伊波洋一氏、沖縄タイムス社の長元朝浩取締役論説委員長ら編集陣、米国海兵隊在日海兵隊基地のロバート・エルドリッジ外交政策部長ら多様な人々だ。普天間基地、嘉手納基地、辺野古テント村訪問、そして基地問題における本土と沖縄との報道比較……。学生たちはさまざまな体験から何を感じたか。参加した学生に寄稿してもらった。

元県知事や地元新聞社

訪ねて聞いて……

濃密な5日間



▲ 辺野古テント村では基地移設反対の座り込みが続く



▲ 元沖縄県知事の大田昌秀さんにインタビュー



▲ 海兵隊司令部の施設内でエルドリッジさんと共に



沖繩市(ゴザ)の資料館で説明を聞く学生たち

寄稿

仮谷雄輔(文2)



▲ 沖縄タイムスの長元論説委員長(右端)の話聞く仮谷さん(学生の右から2人目)

双方の視点で考える 現地での学習で学んだ

「沖縄ジャーナリズム論を通じて、私は沖縄のことについて何も知らなかったと実感しました。沖縄本島の人の立場で考え、何の知識もないままに沖縄の多くの問題は、何となくアメリカが悪いと決めつけていました。で、米海兵隊の視点から」

語学を学ぶなら辞書、歴史を学ぶなら歴史書、知りたいことがあればインターネット、いつのころから私の「知」は、紙や電波に頼ったものになっていました。この夏、沖縄ジャーナリズム論の短期授業に参加し、私の「学ぶ」ことの意識は変わりました。実際に戦争を体験した

叫ぶ人の声を伝える メディアの力信じたい



▲ 沖縄タイムス印刷工場見学の山田絢子さん(紺のシャツでバッグをタスキがけ)ら学生たち

ことを話す人を痛感しました。沖縄の人、と、歴史を学ぶことを大切にしたいという思いが、切に痛みつけられても眠れません。人に痛みつけられても眠れない、他人を痛める民であつては眠れない、ということの意、うのが、昔から変わらないうちの心で、ある問題を考える時、日本と琉球その問題に触れている

「一人」を理解することも重要だと感じました。さまざま立場に置かれた人々、なかには温度差は、なにか目に見えるもので表わされ、主張があります。その主張が表れる象徴的なものとして、教育とメディアがあると思います。沖縄でたくさんの方の話を聞いて、相田みつをさんの詩をひとつ思い出しました。 (セトモノとセトモノ)

山田絢子(文2)

実際に沖縄を訪れ、米軍の沖縄への貢献や海兵隊基地が沖縄のどのくらいを占めているのか自分の目で確認し、現地の新聞社からみた沖縄の状況や記者の方々の意見や、元県知事や元議員、前市長の方々からお話を伺い、貴重な沖縄戦の体験を語ってもらいました。沖縄の研究者の方から、事前学習や知識不足の視点として、沖縄を代表する琉球大学や、米軍ヘリが墜落した沖縄国際大学の先生方から現状を踏まえた今後の対策を示してもらいました。それ